



文芸部 部誌

2020秋號

## 初めに

まずはこの冊子を手を取って下さった皆さん、「ありがとうございます」この冊子は比叡山高校で日頃、華々しく活躍しているとは、決していえない、でも、おもしろい奴らの手になる『小品集』です。

私は、本文芸部の顧問の一人ですが、昨年は別の教員が自分一人の力でがんばりたいとの意向から、ほぼノータッチで一年を過ごしました。いささかの事情で、また今年から私がもう一人別の教員と一緒にこの文芸部をみることになりました。元来、放任主義の私が、コロナ禍で活動の停止を余儀なくされた年度当初から、様々な制約の中での活動で、積極的に部活動に関わるはずもなく、放任の度は増すばかりです。

「もう、おわるー。」生徒よりも、部活を早く切り上げて遊びに行きたい顧問の相手しながら、目立たないかもしれないけれど、とつてもおもしろい奴らが、自分たちの力で、自分たちのために作った、奴ら自身の作品集です。

おの

誰に、何を強制されることもなく、自分たちが欲するままに己が内面を今できる全力で紡いだ、結構曲がりくねった心の叫び、少し他人に受け入れられるために味付けしてあります。

それなりに、くせはありますが、好きな人にはたまらないかもしれません？ 奴らの静かな叫びの結晶、どうか、少し味見してみてください。

文芸部顧問の内一人

## 最後のカラス

いいひと

花の国にはその名に恥じず、街の至る所に目を細めたくなるくらい色鮮やかな装飾がある。それらは確実に街の色彩を豊かにするのに一役買っているが、時に主張の激しさに鬱陶しくなってしまう。見た目を飾る事に力を入れてるのは国王も例外ではない。着る物には特にこだわりが強く仕立て屋に特注で服を作らせては、気に入らなければ難癖をつけて処刑するのだった。

中心街をそれたこじんまりとした通りにも、アリスという娘が経営する服の仕立て屋もとい服屋があった。服の完成度もさることながら近くのパン屋の手伝いをしたり傷ついた鳥を元気になるまで家で介抱したりして人柄も評判が良かった。そんな彼女のもとにも王の兵士が依頼を告げに来るのだった。王の暴政は止まる所を知らず、辺境の彼女に依頼するに至るまで仕立て屋の数を減らしたのだ。アリスは王の満足するような服を作らなければならなかった。仲良くしていた近隣の住人は彼女と目を合わせなくなり、殺されてしまうという噂を流した。どんな一流の仕立て屋でも皆駄目だったのだ。無理のない話だった。彼女もしだいに家に引きこもるようになってしまった。時計の針だけが進む。

「くんばんは。」  
「場違いな時間のことだった。」

彼女がドアを開けると夏の夜の暖かい風が勢いよく家に入り込んでくる。頬を撫でる風が久しく、目の前に立つ男に向けた意識を一瞬忘れるほどだった。背が高く、細身だが一回り大きな服を着ていて不恰好な男。客が来ても滅多に出てこない猫が後ろから威嚇する声が聞こえた。地域のボス猫のようなので気性が荒いこともあるうが。

「アリスさんですよ。あの、私あなたの役に立ちたくて、王様の依頼って聞いて……」

「すいません。それは一人でなんとかします。」  
彼が言い終わる前にアリスは言葉を返した。柄でもない自分の冷たい返答が気にかかった。彼の興奮気味の口調は落胆とともに落ち着きを取り戻したようだ。

「ああ、そうですか……。だったらあなたの服を見せてくれませんか。せっかくここまで来たから。」

「ええ、それなら。」

世間慣れしていなさそうな口調や格好が見られた。そんな彼に冷たく接してしまったことも気がかりだったので、閉めていた店に通すことにした。彼女の作ったいくつもの服はしばらく誰にも見られることのないまま少し埃を被っていた。

「勿体ない。こんなに上手なのに、店を閉めていたなんて……」

電気を付けずとも窓から差し込む街の灯りで店内は見通せた。アリスが進めた服を試着したりもした。彼女の服が素晴らしかったのか彼の見た目が良かったのか、なんでも似合った。

「あの、王様からの依頼、大丈夫ですよ。自信を無くしてませんか。私に何か力になれることがあったら手伝います。」

「その話はやめてください。大体なんでそんなに……」  
涙が出ていた。依頼の件は正直なにもすがりたいほど全く上手くいっていなかった。成功せず、自分も殺されるのだとずっと恐れていた。それも一人で。青年はそんな彼女を見て酷く困惑した様子を見せたが、すぐに何かを決意したような顔つきになった。そして、肌が見える手や顔から毛や羽が生え始め、鳥と同じ顔になってしまった！

「あのですね。私あの時介抱してもらったカラスなんです。あの大怪我であの世やこの世を行ったり来たりしていたせいで化け物になりましたが。」

アリスは彼がはなしている間も生え続ける羽や毛に目を離せなかった。涙はとうに引っ込んでいた。

「あっそれで私助けて頂けなければ死んでいました。だからどうしてもお礼がしたくて、それで。」

「痛っ。」  
化け物の足に猫が噛み付いていた。彼は猫に謝っていた。アリスはそんな状態を面白おかしく思い彼が危険で無いことを理解した。彼は興奮していたので、居間のイスに座らせて話を聞くことにした。彼はカラスは汚いから駆除対象にされて自分以外のカラスは全員死んだ話と人間に化けることができた話とアリスの家を探した時の話をした。アリスも猫を膝に乗せて本当は全然服作りが進んでいない話と期限が迫ることがとても怖いことについて話した。誰にも話せなかったが、打ち解けた彼なら大丈夫だった。

「この布使ってみて。遠い所からかっぱらってきたんだ。綺麗だったから。」

確かにあまり見ない色だったがアリスも持っている麻の布だった。アリスは彼に似合う服をいくつかプレゼントし、見送った。夜は深くなり風も涼しくなっていた。

期限の日が来た。アリスは貰った布で服を作り上げていた。とびきり派手ではないが、心を込めて作った服。ノックの音が聞こえる。アリスにはそれがとても重たいものに聞こえた。王の兵士が二人立っていた。

「黒猫呉服の仕立て屋ですね。」

それ以上のことは言わないという顔をしていた。

「その子は私の弟子ですね。いいでしょう、アリス、あの服を持ってきなさい。」

いつものまにか兵士の後方にカラスの青年がいた。顔はまっすぐアリスの方を向いていた。

「え……。」

「いいから！」

アリスは面食らい言われるままに作った服が入ったケースを持ってきた。彼はそれを奪い取り兵士達に言った。

「さあ、行きましょう。」

アリスは自分がとても重大な事をしたことに気がついた。そして馬車に乗る青年に言った。

「待つて、私も行きます。」

「君は必要ない。ここで待つていなさい。」

それはあの時アリスに接していたような彼では無かった。決意を決めた顔をしていて、威厳すら感じられた。しかし彼女も簡単には引いていられなかった。ここで道を間違えたととても大きな後悔をしようように思えた。

「で、でも……。」

彼は少しうつむいて、それから頷くのだった。馬車が進み始めた。アリスが家を振り返ると、猫が見送るかのようによちらを見ていた。

アリスにとつて窓から見える太陽の光や明るい街は久しぶりで新鮮だった。馬車は確実に恐怖へと向かっていたが、それらが少し気を紛らわせていた。

隣に座る彼はただ前を向いている。「大丈夫？」と小さく声をかけると「ありがとう。」と小さく返した。やはりあの時の頼りなさはなく、人間でなくカラスでもない何か大きなものに感じられた。

天気はお世辞にも良いとは言えず、大広間は蒸し暑い。それでも王は呼びつけた男に気丈に振る舞った。

「ええと、あなたが黒猫呉服の仕立て屋。楽しみにしていたんだ。早く見せてくれ。」

「そう、焦らずに王様。服は逃げませんよ。」

掴みどころのない怪しい雰囲気をもつその男は、ケースから服を取り出してそういった。白を中心としているが地味とは程遠く、透き通った美しさすら感じさせる服。

「ふむ、どうかな……。」

王様はとんでもない男だ。

「ところであの娘は誰だい。」

「ただの弟子です。どうかお気になさらず。」

第一に戦争が好きで二に金が好き、そんな男。

「ハデさが足りないねえ。」

「まあまあ、一度着てみたらどうですか。」

彼はこの国での着飾りがとても大切な事を知っているからこのようなことをするだけで、本当は服には興味が全くない。

「どうだい……。」

「似合ってますよ。」

綺麗な服を見たいわけではなく、ただ人を殺したかった。

「駄目だ！こいつも駄目！花の国に相応しくない！処刑だ！」

王様はこの瞬間が大好きだった。放心するものや命乞いをするものを見ている時間が。仕立て屋の男は少し残念そうに言った。

「ああ、センスがないなあ。」

そして上着の内側からいきなりナイフを取り出し、止まらぬ勢いで王様の胸に刺した。声にならない悲鳴だった。王様は怒り狂った声で出せるだけの声を出した。

「この狂人を射殺しろ！」

王様が生きている限り命令に背く者はいなかった。男の体は血とともに飛んだ。不思議なことに羽を撒き散らしながら。やめてという高い声が聞こえた。気もするが銃声の中にかき消された。静寂が訪れると一つの死体には娘が覆い被さり泣いていた。もう一つの死体には透き通った服が血に染まり美しささえ感じさせるような光を放っていた。娘は保護されて、王様の死は一日中隠された。次の日、隠しても仕方がないと判断され、娘の解放とともに王様の死が公表された。その夜は数十匹の猫が抗議するように城下町で鳴き続

けたという噂が流れた。夜風も涼しくなった季節、王様の暴政は終わりを告げ、花の国は本当に美しい国に生まれ変わろうとしていた。



## 裏口の先

おひさま

会議が始まって約二時間、疲れを感じ始めた俺はトイレに行くため席を外した。

トイレは会議室を出て突き当たりだが、とても遠く感じる。

しばらく経って会議室に戻ったが皆いなくなって静寂に包まれていた。

会議終わったのか……？

そう思ったが机の上には書類が散らばったままだしホワイトボードも消されていない。

「みんなどこ行ったんだ、あいつに聞いてみるか。」

何度も電話をかけたが一向に返事がない。仕方なく社内を搜索することにした。

不動産会社だけあって一階には応接室がたくさんある。一部屋一部屋確認して回ったが、誰一人いなかった。だが、一部屋だけ不自然な部屋があった。

第一通路の突き当たり、会議室の真下だ。この部屋は一度も使われたことがないらしいが、やけに散らかっていて、不穏な空気が漂っている。二階、三階も同様に搜索したが、それ以外に変な部屋はなかった。

「何もないな、あの部屋搜索するしかないか。」

部屋に入ってすぐ左手にある電気のスイッチを押す。バチツと音を立てたと思ったら動かなくなってしまった。幸い懐中電灯を携帯していたから灯りは確保できた。

十四畳ほどはあるであろう部屋には長机が雑に置かれているし、床にはいろんな紙が散乱している。

「すげー散らばってるな。……な、なんだこれ。」

散乱した紙の中に赤い字で書かれた妙な紙があった。

「血だよな、これ。」

そんなに日は経っていないだろう真新しい血液で書かれた紙には、

『ウラグチ』

ほとんどつぶれて読みにくい字だったが、なんとか読むことができた。

裏口はこの部屋のすぐ隣にある。嫌な感じはしたが、裏口に向かった。

部屋を出て気がついたが、床には裏口へ続く血痕が残っている。ポツポツとある血痕に沿って歩いた。

裏口は分厚い鉄の扉で、ドアノブにも血が付着している。近くにあったビニール袋を使ってドアノブを回す。あまり開かれたことがないのだろうか、ギギギと蝶番が悲鳴を上げながら重い扉が開いた。

「ここ、裏口だよな……。」

扉の先には、薄暗くほとんど先の見えない通路が続いていた。

何があんだらう。明らかに怪しい通路だったが、一歩足を踏み入れた。ひんやりと冷たい空気が体を覆い、引き込まれるように先へ進む。

二十メートルほど進んだところで、通路は二手に分かれていた。血痕もピタツと止まった。

「どっちに行けば良いんだ。何も手掛かりはないな。」

引き返すことも出来ただろうが、なんとなく右手に進んだ。大きくカーブしている通路はだんだん細く、狭くなっていった。

少し屈まないに進めないほどになった時、目の前に小さな扉があることに気がついた。静かにドアノブを回す。鍵は空いているようだ。ゆっくりと扉を引き、顔を上げた。

大事な会議の途中に一時間もどこに行っておった。早く席に着け。

そこは皆いなくなっていた会議室だった。何がなんだかわからなかったが、とりあえず席に着いて会議に戻った。

会議が終わってすぐ一階に向かった。

そこに裏口なんかなく、一枚の紙切れが落ちているだけだった。

梅酒飲んでみ？美味しいから！

poipoi

ある女の子は泣きながら

大切な人を返してください。

と神さまにお願いしました。神さまはとても意地悪で願い事を叶える代わりに、その代償を要求しました。女の子は迷わずそれに応じました。この物語はそんな女の子の物語。

女の子は薬草を探しに森の中に入ると、倒れている青年を見つけ、家で彼を介抱しました。



彼は目を覚ましました。ですが大変なことに彼には記憶がありませんでした。彼女は困惑しました。

出身も名前も何もわかりませんでした。しかし、彼女は前向きでした。彼が記憶を取り戻すまで彼女が名前を決め、一緒に行動しようと提案しました。彼も困惑しますがそれに賛成しました。

彼らはとても幸せそうでした。二人は愛し合い、子どもにも恵まれました。ですが、そんな幸せな日々は突然になくなりました。

彼の正体は神さまでした。そんな彼を人々は恐れ、鬼と憎むようになってしまいました。そして、すべての天災を彼の仕業だと決めつけ、刃を向けました。それは彼女と子どもにも向けられました。

彼女と子どもは人々に捕まり、殺されそうになりました。彼はそれを力づくで止めました。多くの人が死にました。

彼は力を酷使し、身体が崩れ始めました。その時、彼女は思い出しました。前世で結んだ、意地悪な神さまとの約束を。

彼女は神さまに頼みました。

彼が死んでしまいました。彼を生き返らせてください。

意地悪な神さまは応えました。

分かりました。その代わりに、あなたたちの記憶を消し、彼に私の役目を押し付けます。

彼女はまた泣き崩れます。今度はごめんなさいと。



使えない塵芥ね。  
もーいわ。あなたの物語に  
はきよーみないわ。

ゲロカス

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。  
彼は彼女を恨みませんでした。  
彼も言いました。

あなたの人生を引っ掻き回してきた、わたしの最後のお願いです。あなたは生きてください。そして私のようにならないでください。

はい。私はこのような結末を迎える世界を是とするのは、これで終わりにします。そして、誰も傷つけず、傷つかない世界をつくります。

ありがとうございます。わたしはよい父にはなれませんでした。が今度こそ、あなたたちのよい父になりましょう。

これはとても古いお伽話。神さまと人の違いによつてうまれた不思議な物語。

少女はつまらない顔で、そのスクリーンを眺めていた。

また同じストーリー……。違う終わり方はないの？

彼女は梅干しの種を噛みながら言った。が、返しはこない。

違うストーリーも描けないの？使えない塵芥（ごみ）ね。もーいわ。あなたの物語にはきよーみないわゲロカス。さてと、どこかに面白そうな悲劇でも転がってるかしら？

少女は梅干しの種を噛み砕き、唄った。

一度目なら、今度こそはと私は思う。

避けられなかった現実。

2度目なら、またかと私は呆れる。

避けられなかった現実。

3度目なら、まさかと私は気付き始める。

避けることのできない現実。

10(と)を数えるとそろそろ喜劇になる。

残酷な笑みの向こうで

はあ、とため息が聞こえる。



あなたにわからなかったもの  
それはなに？

わたしにわからなかったもの

それはなに？

わたしたちが気付けなかったもの  
それはわたしとあなたの思い違い



ココには、自分たちを縛り付ける身勝手な奴は居ない。綺麗事を語る政治家も、怒鳴り散らかす上司も、お世辞を並べる友人も、なんにもいない。そう、例えるならば警察も友情も愛情も喜びもお金も性別もナニモノイトコロ。言うなれば、ココにあるのはセカイと誰かの少しの悲しみだけ。

『×××』

周りを見渡すと、フードやキャップ、前髪などで自分の顔を隠したヤツで（朱張り）溢れていた。いつ見てもキノセカイは変わらない。矢張りココは安心する。

このセカイでは、ダレも本名を名乗らない。みんな、なりたかった自分を名乗る。

詰まり、男にも女にもなりきれないボクは中性的な名前を。

「ソデハ」という性別不詳のボクは、「ユヅキ」という中世的な名を、自分とは似て非なる名前を名乗るわけだ。

と、ここで上から大きな爆発音がした。鼻の無い皆が一斉に音の鳴った方を見る。

どうやらビルで爆発したようで、焦げ臭い木の匂いと豚の焼けたようなにおいがした。

空には火柱がかかり、まるで空がハレたように輝いた。

しばらくして、そのビルの中のモノが全部焼けたのだろうか、火は水をかけてもないのに徐々に消えて五分前後で全て消えた。

ビルから出てきた大男が見えたからボクはその男に駆け寄った。

「何人燃えたかな？」と尋ねると

「さあ？き、いが…に誰も知らない。」

とノイズが入りつつもそう答えられた。

豚の匂いで胸が潰れた。

ボクは鼻を失った。

『×××』

少し綺麗な空気を吸おう、そう思ってボクは雪山に登った。その山はすごく高くて険しいが、なぜだろうか、息も切れずに十分前半で登れた。

「案外、早く登れちゃったなあ…次からはもっと高くしよう。」

そう思っていると、今度は下から大きな爆発音が聞こえた。耳の無い登山者が一斉にそちらを見た。

どうやら雪崩が起こったようだ。雪が地を滑った力強い音の余韻が鼓膜を震わせる。

空中には、再び舞った雪の結晶が踊り、まるでユキが降った後のようにな

た。十秒ほどで雪崩はおさまり、雪のミルフィーユからいくつかの人が出てきた。

雪崩から出てきた大男が見えたからボクはその男に駆け寄った。

「何人潰れたかな？」と尋ねると

「さあ？、み、がいに誰も知らない。」

とノイズが入りつつもそう答えられた。

耳奥に違和感として残った地を滑る音で鼓膜が切れた。

ボクは鼓膜を失った。

『×××』

破れた鼓膜で細波の優しい音色を聴こう。そう考えてボクは海に向かった。その海はとても広くて美しく何時間でもいられるような気がした。

「案外、海も良いもんだなあ…次もまた来よう。」

そう考えていると、波が高く上がって泳いでた人やボートに乗っていた人、

海辺にいた人がみんな消えた。

波の上には水飛沫が激しく散り、まるでアメの後のようだった。

でも、十五分もしたら波も元の穏やかさに戻った。

海水の中から出てきた大男が見えたからボクはその男に駆け寄った。

「何人溺れたかな？」と尋ねると

「さあ？きみ、がいに誰も知らない。」

とノイズが入りつつもそう教えられた。

五分しか居なかったのに海水でふやけ過ぎた手が少し痛かった。

ボクは皮膚を失った。

『××××』

今日は、街にも、山にも、海にも行ったからかな、疲れたな。

そうだ、ゆっくりするためにも小さな船で一人旅に出よう。

とはいえ、ボクはこの世界から出られないけど。そんなつまらないジョークを考えてボクは一人でクスクスと笑った。

船を出してしばらく、一人空を眺めていると急に曇りだして嵐が来た。

波が荒れて船は右や後ろ、上や下にてんやわんやで目が回った。

どこが前なのか分からなくなっていると後ろでゴロゴロ、と大きな音がした。

カミナリだ。カミナリを目印にしよう。そう思ってボクは目を大きく見開いて後ろを見た。

するととてもとても、それはあまりに大き過ぎるカミナリが目の前を過ぎた。

痛っ！

ボクはあまりの痛みに思わず目を強く瞑った。痛い痛い痛い痛いと激痛が目

が訴えかけた。

痛い？なぜ痛い？？あ、そうか。ボクには明る過ぎたのか。

成る程成る程。

さて、そろそろ目の痛みも引いてきた。目を開けて前を確認しなければ。

ボクは目を開けて前を見た。

けれど、ボクの世界は真つ暗なままだった。

暗闇の中からまた、見えてきた大男に駆け寄った。

「何が視える？」そう尋ねると

「さあ？君以外に誰も知らない。」

セカイは目ヒカリを失った。

『？』

キョウもセカイはブタニクのヤケたニオイがスルモノをタベル。

セカイはアジを失った。

『×』

どうして空は青いの？

「それは、太陽の光が大気中に飛び散るから。」

どうして宇宙ができたの？

「それは、宇宙の種が爆発したから。」

どうして僕は…この世界から出れないの？

「それは、(世界が君だから)。」

世界って何？

世界は(君)だよ。

世界は白に包まれた。

『結』

どうも、皆様、おはよう御座います。そちらのお天気の調子はどうですか？

こちらは、裏の世界だからでしょうか。そちらのお天気とは違ってばらばら

で、今日の世界は晴れ後雪後雨後雷であります。

また、今日のゲジさんの調子は承の内終で、今日の一日は平和でしょう。

因みに、揚羽の今日の色は白でございます。

『跋』

ボクは、ある目的の場所へと向かって駆ける。

ある薄暗い裏道を右左右左左左左左右右右右左左左の順に進むと、薄暗い路地裏に着く。そしてその路地裏を目を瞑ってまっすぐと駆け抜けると怪しげなネオンの光で包まれた場所に着く。

ここはオモテが裏と呼ぶ世界。所謂（いわゆる）秘密を抱えた奴らが集う非現実世界。

ここには、自分たちを縛り付けるミガツテナヤツは居ない。クレイゴトヲカタルセイジカも、ドナリチラカスジョウシも、オセジヲナラベルユウジンも、なんにもいない。そう、例えるならばケイサツもユウジョウもアイジヨウもヨロコビもオカネもセイベツも何も無い所。言うなれば、ここにあるのは世界と誰かの少しの悲しみだけ。

世界の少年少女の物語のセカイに存在した世界は終わりを迎えその世界に存在したセカイは始まりを迎える。

（性別不詳少年的存在 × 少女 終）

## 鳥籠

青い金平糖

『うしろのしようめんだーれ』

無機質な女の声。

何度か聞いたことのある声。

思い出せとでも言いたげなその声に、私は無視を決め込んだ。

退廃した街に、冷たい雨が降り注ぐ。

檻に閉ざされたこの街は、瓦礫やゴミだけがまみれていてその他には廃墟しかない。

冷たい檻の向こうには、温かい光が差している。

止まない雨は容赦無く体温を奪い、生きる気力も削いでいく。

雨水は瓦礫やゴミに降り注いで黒く汚れて流れていく。

寒いなんて感覚すらも鈍ってしまうほどに冷え切った自分の体を両腕で抱きしめた。

『かーごめ かーごめ』

耳に、聴き慣れた歌が届く。

たくさんの子供が歌うこの歌は、何故かは分からないが私は苦手だ。

檻の向こう、広がる世界。

私は永遠に手に入れることのできない世界。

羨ましいなんて感情はすでに消え失せていた。

手の届かない温かい世界、私にとってはそれだけだった。

『かーごのなーかのとーりは』

歌は大きくなる。

最初は数人、そして数十人に。

そして少しずつ、声は大人のそれに近づいていく。

ゴミ捨て場だった所には、テレビや砂時計、ランドセルが捨てられている。

それらが一体いつからあるのか、誰が捨てたのかは分からない。

私はその中の落書きだらけのランドセルに手を伸ばした。黒くぼろぼろのそれは、きつと元は素敵な赤色だったんだと思う。：きつと。

悴んだ手で開けてみると、中にはアルバムが入っていた。きちんと管理されていなかったのか、黒く塗り潰された写真が二枚だけ剥がれ落ちてきた。

一枚は、顔の塗り潰された人が三人写っている。

二人は大人、一人は子供。

三人は寄り添って、とても綺麗な服を着て、髪も整えられている。

私とは大違いね。

自分の格好を見て、私はそう思った。

ぼろぼろで丈の短くなった白いワンピース、伸びっぱなしの髪、痩せた体、

いつも裸足だから傷だらけの足。

惨め。その一言に尽きた。

もう一枚は、沢山の同じ服を着た子供が並んでいる写真。

これも顔が黒く塗り潰されていて、誰がどんな表情をしているのかすら分からなかった。

ただ、さっきの写真に写っていた子供らしき人間の姿は見て取れた。

みんな手を繋いでいて、何となく楽しいのだろうと思った。

これも、私とは大違いね。

この檻の中には私以外誰もいない。

一人ぼっち。こんなふうに誰かと手を繋ぐことも無い。

気付けば、強く写真を握りしめていた。

私は写真を捨て、ランドセルの中を漁る。

と、手記が出てきた。

教科書に出てくるような丁寧なものではあるが、どこか子供じみた雰囲気

纏うその字を私はゆっくり辿る。

「天網は存在しなかった。情景は私を大袈裟だと嘲笑い、空は私を見放し

た。都合の良い救済など、夢のまた夢だった。：？」

読み上げてみたものの、難しい言葉が並べられていて如何せん意味が分から

ない。

ページをめくっていくと、今度は書き殴られたようなかろうじて読める文字

が現れた。

「私は：籠の中？」

ますます意味が分からない。

他のページには何も書かれていない。

私は手記とぼろぼろになった写真をランドセルに戻し、その場を立ち去った。

『いーついでやる』  
歌は続く。…もう、数十人はいる。  
声は更に大人のそれに近付き、威圧を感じ取ってしまうほどの無機質で温度のないものになっていた。

道と呼ぶには荒れすぎている地面に包丁が刺さっている。

こんな物、あったっけ。

この檻の中でこういう変化は珍しい。

赤い液体がべったりと付着したそれは、ずっと雨が降っているのに錆びてすらいなかった。

…汚い。

その不気味な赤色は、どこかで見たことがある気がした。

包丁を地面から引き抜くと、地面に赤い染みがあることに気付いた。

まるで辿れと言わんばかりに点々と続く染みを、私は素直に辿って行く。

雨でも流れない、赤い液体。

辿って行くほど、染みは大きく赤黒くなっていく。

しばらく歩いていけると、檻のすぐそばにヒビの入った鏡があった。

鏡の正面に立つと、人が映る。

「……!?!」

私じゃない、誰かが映っている。

思わず私は後退るが、鏡の中の人間はピクリとも動かない。

背の高い、大人。

随分と寡れた表情でこちらを見ている女。

まるで私を見下しているかのように、邪魔だとしても言いたげにこちらを見ている。

気持ち悪い、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。

強い吐き気が込み上げてくる。

なんでここに、こんな物が？

昨日までは無かったのに。

これは一体何なの？

得体の知れない何かに、私は大袈裟なほどに震える。

何故か、この鏡が怖くて仕方ないのだ。

『よあけのばんに つーるとかーめがすーべった』  
歌は止まない。大人の声が混じる。

嫌な声。怒鳴り声、甲高い叫び声、泣き声。

私はその場から走り去った。

生まれて初めて走った。

「出して、出してよ、ここから出して」

檻を掴む。もちろんビクともしない。

それでも、初めて逃げたいと思った。

空高く、どこまでも高く伸びる檻。

一生出られない。

そんなことは分かっている。分かっているのに。

恐怖が頭を塗り潰していく。

『うしろのしょうめん だーれ』

声は聞き覚えのある一人になって、歌が止まる。

振り返ると、私はあの鏡の前に立っていた。

なんで、どうして。







おひさま

こずみけり

一年ぶりの

松手入

今回から俳句の解説も載せることにしました。  
この俳句を見てくれている人がどれだけいるかわからないですが、『解説載せたほうがいいだろう。』とアドバイスも出たので、載せます。  
解説なんかいらねーよって人は飛ばしてください。

こずみけり 一年ぶりの 松手入

季語は『松手入』

毎年八月ごろになると、僕の家では庭先の植木の剪定をします。

「こずむ」は方言なのでしょうか。部員にも伝わらない人がいました。  
「こずむ」は「生い茂る」みたいな感じですよ。

おひさまや

稲架の影踏む

小さな子

おひさまや 稲架の影踏む 小さな子

はざ

季語は『稲架』

「稲架」は刈り取った稲を懸けて干す道具です。

ある晴天の日に散歩をしていたら、稲刈りの終えた田で小さな子が遊んでいたという話です。

足跡追駆

鹿垣の間広し

足跡追駆 鹿垣の間広し

ししがき

季語は『鹿垣』

「鹿垣」は枝のついた木や竹で作った垣で、田畑に鹿や猪などの侵入するのを防ぐものです。

僕の家から数分のところに広い土地があるのですが、食べる物があるのでし  
ょうか、鹿などが来ているようです。

ある日、畑に行った時に何かの足跡がありました。それを追っていった先に  
前はそんなに大きくなかった間が大きくなっていったという話です。

## 編集後記

この度はこの雑誌を手に取りここまで読んで頂き、まことにありがとうございます。今年度は一学期始めの休校を主として何かとイレギュラーでしたが、文芸部はありがたいことに新入部員も獲得し、しぶとく生き残っています。僕は今編集後記を書いているわけですがここで思い出されるのは前回前々回の雑誌にこれを書いていた先輩方です。先代から繋いできたバトンがあるからこそこの部活雑誌は「重み」を持つことができます。そんな一つ一つ積み上がっていく歴史に参与できたことを嬉しく思っています。この部活雑誌は顧問の先生方、部員仲間、色々な人がいなければ有り得ませんでした。そして忘れてはならないのが読者である貴方です。貴方がこれを読むことでこの作品集は存在する意味を全うできています。貴方も、この小さな歴史の立派な立役者の一人であることをお知らせするとともに、最後にもう一度『ありがとう』を伝えておきます。あと部員は一年中募集しています。